

# 都市部に居住する閉じこもり高齢者の特性とまちづくりに関する考察

橋本 美芽<sup>1)</sup> 石橋 裕<sup>1)</sup> 長野 博一<sup>2)</sup>

本研究では、閉じこもり高齢者の外出目的や外出手段、まちづくりへの要望等の特徴を、非閉じこもり高齢者との比較により検討した。調査は、東京都荒川区A地区に住む65歳以上の全高齢者を対象に郵送法により実施した。比較の結果、閉じこもり高齢者は、関節疾患を有する割合が有意に高かった。また、外出時に杖を使用する割合が有意に高いこと、ベンチ（休憩場所）の増設に関する要望が有意に多いことが示された。歩行の耐久性が低下した閉じこもりの改善と外出行動の活性化に、物理的環境の整備が貢献する可能性が示された。

## 高齢者、閉じこもり、外出行動、都市環境、外出支援、まちづくり

### 1. はじめに

東京都荒川区は、都内有数の都市型住宅密集地域であるが、バリアフリー新法に基づき、平成22年度に荒川区バリアフリー基本構想を策定した。また、鉄道駅を中心に半径500mかつ100ha程度の範囲を4地区設定し重点整備地区とした<sup>1)</sup>。「高齢者、障がい者、妊産婦や乳児同伴者等、誰もが安全、安心、快適に移動・利用できる空間を計画的に整備するため」に地区別基本構想の策定に取り組んでいる。基本構想の具体的方策検討の基礎資料として、都市型住宅密集地域における高齢者の外出行動の把握が必要となった。

### 2. 研究目的

本研究は、高齢者の外出行動特性の把握と、それに即したまちづくりの在り方を探ることを目的とする。本報告では、特に外出頻度が低下した閉じこもり高齢者の外出目的や外出手段、まちづくりへの要望等の特徴を非閉じこもり高齢者との比較により検討した結果を報告する。

### 3. 研究方法

#### 3-1 調査地および調査対象者

東京都荒川区都市整備部都市計画課と協力して、住民基本台帳をもとに重点整備地区A地区に居住する65歳以上の全高齢者5135名を対象とした。

#### 3-2 調査方法

郵送法によりアンケート調査を実施した。調査期間は、2011年1月22日～2月15日であった。

#### 3-3 調査項目

対象者の基本情報（年齢、性別、健康状態、要介護状態の有無、同居家族）、外出頻度、外出目的、住戸形態、外出不安因子、まちづくりへの要

望、等とした。

### 3-4 分析方法

厚生労働省の定める閉じこもりの定義に基づき外出頻度が「1週間に1回未満」と回答した者を閉じこもり該当者、「週に1回以上は外出」と回答した者を非閉じこもりに分類し、 $\chi^2$ 検定とt検定で比較し、有意水準を5%未満( $p < .05$ )とした。また、外出行動に関する質問項目については、閉じこもり群を従属変数、有意差が認められた質問項目を独立変数としたロジスティック回帰分析(変数増加法)を行った。

### 4. 調査結果

回答者数は1891名(36.8%)であった。回答者より要支援・要介護認定者、入院・入所・死亡等を除き、分析対象者は1535名となった。(表1)

#### 4-1 閉じこもり高齢者の出現率

外出頻度より分類した結果、閉じこもり群251名、非閉じこもり群1284名となった。閉じこもり群が回答者数に占める割合(出現率)は12.7%であった。

#### 4-2 閉じこもり高齢者の基本属性

閉じこもり群と非閉じこもり群の比較結果では、性別による有意差は認められなかった。年齢では、閉じこもり群の平均年齢は76.2±6.53歳で、非閉

表1 分析対象者の抽出

分析対象者		分析除外者	
閉じこもり群	非閉じこもり群	入院・入所死亡等	介護保険認定者
251名	1284名	91名	265名

1)会員：首都大学東京健康福祉学部 〒116-8551 東京都荒川区東尾久7-2-10 E-mail：mime.h@hs.tmu.ac.jp

2)会員：荒川区都市整備部都市計画課

表2 閉じこもり群と非閉じこもり群の基本情報の比較

項目	カテゴリー・単位	閉じこもり群 n=251		非閉じこもり群 n=1284		p 値	
		数	欠損値	数	欠損値		
治療中の疾患	脳血管障害	あり・数 (%)	6 (3.1)	63	24 (2.8)	413	.771
	糖尿病	あり・数 (%)	31 (16.2)	63	130 (14.9)	413	.649
	関節疾患	あり・数 (%)	44 (23.0)	63	137 (15.7)	413	.015*
	高血圧	あり・数 (%)	96 (50.6)	63	501 (57.5)	413	.067
	心疾患	あり・数 (%)	27 (14.1)	63	91 (10.4)	413	.142
過去1年の入院有無	あり・数 (%)	53 (21.2)	1	148 (11.6)	8	.000***	
同居家族の有無	一人暮らし・数 (%)	75 (30.9)	8	274 (21.5)	12	.002**	

$\chi^2$ 検定で分析 \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001.

じこもり群の 73.2±5.97 歳よりも有意に高かった。治療中の疾患は、関節疾患ありが閉じこもり群 23.0%と非閉じこもり群の 15.7%よりも有意に高かったが、脳血管障害、糖尿病、高血圧、心疾患、その他の疾患の有無では有意差は認められなかった。家族構成では、ひとり暮らしが閉じこもり群では 30.9%であり、非閉じこもり群の 21.5%よりも有意に高かった。(表2)

#### 4-3 外出に用いる道具と交通手段

公共交通機関の利用では、バス、タクシーについては、閉じこもり群、非閉じこもり群間に有意差は見られなかったが、JR、地下鉄等の鉄道では有意差がみられた。移動に用いる道具では、非閉じこもり群では自転車が、また、閉じこもり群では杖の使用が有意に多かった。

#### 4-4 住戸形態の特徴

住戸形態に関しては、一戸建てに居住する高齢者間に有意差は見られなかったが、アパート・マンション等の集合住宅居住者では、居住階にかかわらず、エレベーターの有無に関して、両群の間に有意差が見られ、閉じこもり群ではエレベーターのない住宅に居住する者が多いことが示された。

#### 4-5 居室部屋と座り方

毎日長時間過ごす部屋に関しては、和室で過ごす者が閉じこもり群で有意に多く、座り方ではソファーに座るが有意に多かった。

#### 4-6 外出に感じる心配や不安

外出に心配や不安を感じるかについては、感じるとの回答が閉じこもり群で有意に多く、具体的な内容としては、休憩場所の不足、荷物の持ち運び、に関して不安を感じていた。

#### 4-7 外出ししやすいまちづくりへの要望

まちづくりに関する要望については、非閉じこもり群では、歩道の整備(車道との区分、障害物

の撤去等)、駐輪場の増設、自転車マナーの向上、に関する項目が有意に多かった。これに対し、非閉じこもり群では、歩道と自転車道の区分、ベンチ(休憩場所)の増設について、有意に多かった。

#### 4-8 ロジスティック回帰分析の結果

ロジスティック回帰分析の結果、閉じこもり群は杖の使用とベンチ増設の要望と正の関連(杖使用; オッズ比 3.38, 95%信頼区間 1.479-9.929、ベンチの増設; オッズ比 2.44, 95%信頼区間 1.440-4.125)が示された。

#### 5. 考察

本報告では、分析対象者から要支援・要介護認定者を除外したが、閉じこもり高齢者群の状態像は、関節疾患、杖使用、等の身体機能に関する情報から、歩行能力の低下をうかがうことができた。また、環境面では、エレベーター設置の有無が外出頻度に影響を与え、屋外では歩行中の休憩場所としてベンチの必要性が示された。高齢者の外出頻度を維持し外出行動の活性化を図るには、歩行の耐久性への配慮と疲労の軽減、休憩場所の確保に配慮が求められている。また、歩道を走る自転車とのすれ違いへの不安が大きく、物理的改善には限界がある住宅密集地域の狭隘道路における課題が明らかになった。自転車のマナー教育は新たな啓発の取り組みを検討する必要がある。

#### 6. 今後の展開

今回の調査で、歩行の耐久性低下に対する配慮の必要性と、物理的整備による配慮が外出行動に貢献する可能性が示された。今後は、さらに外出行動の活性化に求められるまちづくりの条件を明らかにすることをめざす。

#### 引用文献

- 1) 荒川区バリアフリー基本構想、p 32-42、荒川区、2011.3